

精読授業のロールプレイにおける評価の再実践
ー評価シートの改善を中心にー

大学名： 南京農業大学

氏名： 王薇

1. 実践の背景

日本語教育の分野では、近年学習者が主体となる評価方法という学習者主導型評価活動が重視されている。前回の実践は「can-do」による評価システムを導入し、精読授業のロールプレイに評価シートと自己評価チェックリストを取り入れる活動の実証研究を試みた。アンケート調査およびインタビューにより、前回の実践の問題点の一つは、精読授業のロールプレイに評価シートの改善である。

日本語教育現場での評価に焦点を置く先行研究は多くない。中国内外を問わず、先行研究を概観すれば、中国内の研究は探索の段階であり、特に教育に結び付けている論文は多くない。日本での先行研究では、JF 日本語教育スタンダードに基づく評価の問題点に関する検討が十分であるとは言いがたい。長坂、押尾（2013）は JF 口頭テストの概要を説明し、試行結果を論じている。関崎ら（2011）は研修参加者やコースの目標にを合わせ、評価指標と評価シートの改善には言及しているが、学習者に相応する定量的及び定性的分析は伴っていない。本稿では、定量的及び定性的分析を取り上げ、わが国の日本語教育の現状と学習者の実際の言語能力に適用でき、学習者間相互交流と教師の自己反省を促進できる評価方法を探りたい。以下においては、まず前回のアンケート調査及びインタビューによる評価シートの問題点と改善点をたどり、次に改善した評価シートを取り入れる実践の概要を述べる。さらに、学習者に再びアンケート調査及びインタビューを行い、再実践の結果及び問題点について分析したい。

2. 前回の評価シートの問題点及び改善点

・前回の評価シートの問題点

前回の実践概要は 2014 年日本語教育学実践研修のレポート集を参照すればわかりやすい。その問題点は以下の通りである。事前アンケート調査及びインタビューによると、34 人中 11 人が評価シートに対して、まだ改善する必要があると答えている。そのうち「A 抽象的で、理解しにくい。」を選んだ人は 3 人、「B 格差がはっきりしない。」を選んだ人は 6 人、「C 標準の設定レベルが自分のレベルに合わない。」を選んだ人は 2 人であった。ここから、評価シートの修正を行う必要性が確認できる。

・改善点（添付資料 1.2.3 を参照する）

① 問題 A の改善措置として、JF スタンダードの基準を中国語に翻訳する時に、逐語訳を避け、なるべくわかりやすい言葉で簡潔に意識する。問題 B に対して、前回の評価シートは 4 つのレベルに分けられ、すべてのレベルに評価基準が詳しく設定されていた。改善した評価シートは前回の 3 点に相当する基準を評価のポイントとしている。すなわち 2 年生が達成できる目標とする A2 の標準である。したがって、学習者が 4 つのレベルの格差を詳細に識別する必要はなく、また評価シートも簡潔になる。問題 C の対策は、評価基準を設定する前に、学習者に口頭能力に関する自己評価をさせることや、口頭能力テストを行う診断的評価により、学習者のレベルを考察することであるが、これについては別稿で検討したい。

② 前回の評価シートは他者評価シートと自己評価シートが分かれていないが、使いやすさと両者の主観的な評価部分の違いを考慮するため、改善した評価表は両者を分け、他者評価シートにおける主観的評価（発表のよかったこと、難しかったことの自由記述欄）に、資料に対する評価が追加された。自己評価シートにおける主観的評価に、練習時と比較す

る項目も増えた。

③ 改善した他者評価シートと自己評価シートは、評価シートに対する学習者がフィードバックできる記述欄も加えられ、教師はこれにより、評価シートをより良い見直しや改善を促進するために使うことができる。

3. 実践の概要

3.1 目的

JF 日本語教育スタンダードは言語方面では明確な細則を設定していない。つまり、どの単語や文型をどのレベルに配置するのかは明らかにしていない。母語が中国語で、ゼロからスタートした学生に対して、学習の目標と評価手段の一貫性を維持しながら、実際の言語能力に適応する評価基準をどのように設定するのが、大きな課題となる。また、JF 日本語教育スタンダードは、主に日本に留学する学習者を対象として設置された。本稿の目的は、わが国の日本語教育の現状と学習者の実際の言語能力に適用でき、学習者間相互交流と自己反省を促進できる評価方法を検討することである。

3.2 対象

実践の対象は南京農業大学外国語学院日本語科の二年生 29 人(一つのクラス)で、学習者の人数は前学年より 5 人減少した。(本大学では、二年生になる前に、ほかの専門分野に専攻を変更できる。)

3.3 活動内容

日本語科における主幹科目の「日本語精読」は一年生の前期から開講され、二年生向けの「中級日本語 I」のロールプレイ(第 1 課～第 2 課、2 回)において、改善した評価シートの実践を試みた。表 1 は活動の内容を示したものである。

表 1. 活動の内容

日程	テキストのテーマ	活動の内容
9/11 金 (10. 40-11. 25AM)	いただきます	夫婦で食事をする
9/18 金 (10. 40-11. 25AM)	「何もございません」の日本文化	お客を手料理で持て成す

・使用テキスト：宿久高 周異夫『日本語精読』第二冊(外語教学与研究出版社)

・実施時間：「中級日本語 I」、週に 8 コマ、日に 2 コマ(火曜日は授業なし)、1 コマ 45 分。週に一回、金曜日に、毎課の復習と練習の後、45 分間(次の実践ステップの⑤～⑦を完成する)。

・授業実践の流れ：(①～③は一週間前の授業で行う)

① 評価シートについての説明。②教師は教科書の文章に関する場面を設定し、ポイントを与えて、会話のテーマを設定する。③学生を 4 つのグループ(ABCD)に分けて、グループのメンバーで、ロールプレイの会話文を書いて、次の金曜日に発表する。④教師が事前に改善した自己評価シートと他者評価シートを用意する。⑤各グループのロールプレイの発表。⑥前回アンケート調査およびインタビューにより改善した自己評価シートと他者評価シート([can-do]によって作られた評価基準表)を学生に記入してもらう。⑦教師は 4 つのグループ(ABCD)のロールプレイについての問題点を洗い出し、全体に指導する。

・実践方法：アンケート調査やインタビューでロールプレイに対する意識の事前調査→改善した評価シートでロールプレイの自己評価と他者評価→教師の指導→アンケート調査やインタビューでロールプレイに対する意識再調査

・データの取り方：

① アンケート調査とインタビューで評価シートに対する意識事前調査の文字化②毎回の記入済みのロールプレイの自己評価シートを回収し、データとした③毎回の記入済みのロールプレイの他者評価シートを回収し、データとした④アンケート調査やインタビュー

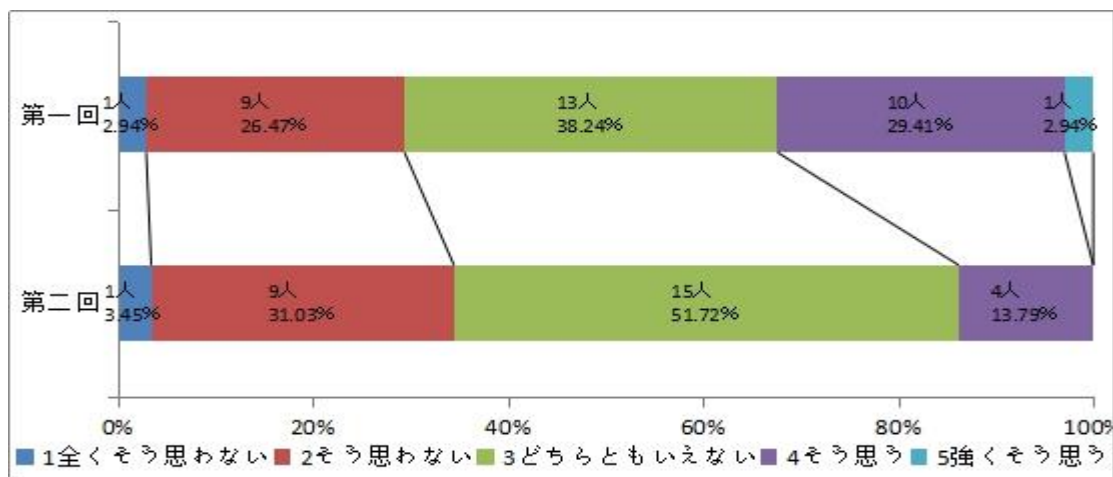
で評価シートに対する意識再調査の文字化

4. 結果分析と考察

4.1 結果分析

実践活動導入前後の学生の評価シートに対する態度を調べるために、5段階評価の評定尺度法を用いたアンケート調査を2回実施した（添付資料4）。その中には「204 評価シートを改善する必要があると思う」という評価シート自体に関する項目がある。この内容の変化をまとめたものが図1である。全体的に見ると、第一回アンケート調査では、この項目に対する「4 そう思う」と「5 強くそう思う」を選んだ学習者、即ち、「評価シートを改善する必要がある」を選んだ学習者は第二回のアンケート調査では前回の11人から4人へ減少した。両者のサンプル数が異なるため、それぞれがサンプル数に占める割合を示している。両者を合わせた人数が総サンプル数に占める割合も大きく変化した。第一回はサンプル数の34人の32.35%を占めている。第二回はサンプル数の29人の13.79%を占めていることがわかる。約19%の低下が見られる。しかしながら、19%のうち、わずか5%が「1 全くそう思わない」と「2 そう思わない」を選んでいいる。つまり、「評価シートを改善する必要がある」と考える学習者であった。残る14%が「3 どちらともいえない」を選んだ学習者であった。第二回アンケート調査では、「3 どちらともいえない」という明確に判定することを避ける学習者がおおよそ半分を占めている。以上のことから、「評価シートを改善する必要がある」を選んだ学習者の割合の低下が見られるものの、「3 どちらともいえない」を選んだ学習者の割合が高いため、具体的な要因については、今後の課題としてより詳細な調査を行うことが必要であろう。学習者の日本語能力の上達も考慮した上で、評価シート自体の問題なのか、ロールプレイに興味がなかったのかを明らかにしていきたい。

図1. 2回のアンケートによる学習者の評価シートに対する態度

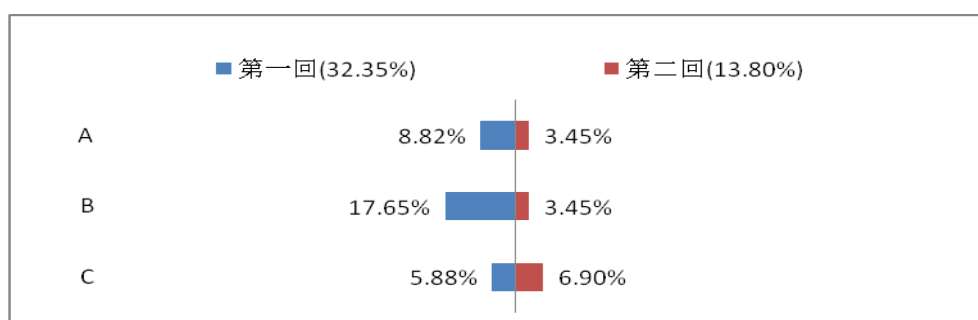


4.2 考察

添付資料のアンケート調査の「204 評価シートを改善する必要があると思う」という項目で、もし「4 そう思う」または「5 強くそう思う」を選ぶならば、学習者は自分の実際状況により、主な理由を選択することが要求された。前述で述べたように、「A 抽象的で、理解しにくい。」「B 格差がはっきりしない。」「C 標準の設定レベルは自分の実態に合わない。」という3つの理由が書かれている。このA、B、Cのそれぞれがサンプルに占める割合を下図2に示した。第一回では、「評価シートを改善必要がある」を選んだ学習者は11人であり、サンプル数の34人の32.35%を占めている。この中には、それぞれAは3人でその割合は8.82%であり、Bは6人で割合は17.65%である。Cは2人で5.88%

を占めている。第二回では、「評価シートを改善する必要がある」を選んだ学習者は4人となり、サンプル数の29人の13.80%を占めている。この中で、AとBはそれぞれ1人で割合が3.45%である。Cを選んだ学習者は2人で6.90%を占めている。第一回では、Bを選んだ学習者がもっとも多く、第二回では、Cを選んだ学習者がもっとも多いことがわかる。今後は、評価基準を設定する前に、学習者に口頭能力に関する自己評価、または口頭能力テスト、CEFR 準拠の『日本語口頭産出能力評価法』略称 OJAE や JF ロールプレイテストを行うことにより、学習者のレベルを事前考察していくことも必要だと考える。

図 2. 評価シートの問題点の割合の変化



上述のアンケート調査のほかに、改善した評価シートを取り入れることについて、実践が終わった直後に学生にインタビューを行った。このインタビューの内容を分析し、今回の実践の成果と問題点を考察してみた。インタビューは、29名の学生を対象に中国語で行った。内容は改善した他者評価シートと自己評価シートに対する感想である。分析に当たっては、KJ法という質的研究法を援用し、以下の手順に従った。①キーワード収集(カード記録)②グルーピング③空間配置④図解化⑤文章化。インタビューの内容を図解化するものが図3である。(添付資料5)

4.3 残る問題点

他者評価シートの問題点については、5人が「前の評価表より抽象的で面倒である。」という意見で、最も多かった。前述したように、前回の評価シートは4つのレベルに分けられ、すべてのレベルに評価基準が詳しく設定されていた。しかし、改善した評価シートは前回の3点に相当する基準を評価のポイントとして述べるだけであり、逆に詳しくないと感じられるからである。3人からは他者評価シートの内容設定に関する具体的な提案があった。内容は以下のとおりである。①社会言語的な適切さという項目がやはり必要であるのは、より自然な日本語になるからである。②「1. 内容・活動」と「2. 談話構成」の区別がはっきりわからない。③主観的評価の資料については書きにくい。なお次の2点は学習者のレベルと関連する問題である。「自分のレベルが足りないため、「5. 文法の正確さ」は判定しにくい。(4人)」及び「6. 発音」は判定しにくく、自分の考えが先生の説明についていけない。(1人)」である。改善措置としては、まず会話のテーマを設定する時、適切に学生のレベルを判断し、それによりある程度会話の難度を下げることである。次に事前にロールプレイの会話を集め、添削する時にPPTで見せながら説明していく。さらに、学生が学習により知識と理解を深め、日本語のレベルが徐々に高まることによっても、ある程度改善できると思われる。

自己評価シートの問題点については、他者評価シートと同じ、5人からは「抽象的であり、詳しくなくて直感的でない。」という意見が出された。その理由はおそらく他者シートと同じではないだろうか。6人からは自己評価シートの内容設定に関する具体的な意見が提出された。具体的な内容は以下のとおりである。①予想達成度という項目を増加すべきである。(2人) ②社会言語的な適切さという項目がやはり必要であり、皆に意識させ

ることができる。③より詳しく設定したほうがよい。たとえば、具体的な間違いやよく書いた句などである。また自覚させるためにしばらく学習者のところに置く。④直感的な項目を増加する。たとえば、魅力や面白さなどである。⑤より詳しく評価者を決める。ロールプレイを書いた人が文法を評価し、発表者は発音を評価する。①～④までは今後参考にできるところがあり、⑤は実際実行するには多少難しさがあるが、ロールプレイの実施の仕方について考え直す必要がある。「客観的に「6. 発音」は判定しにくい」という意見を提出したのは3人であった。自分自身の発音は判定しにくいため、客観的に評価するのが難しいのである。それを解決するために、国立国語研究所・共同研究プロジェクト「日本語教育のためのコーパスを利用したオンライン日本語アクセント辞書」OJAD (On Line Japanese Accent Dictionary) の韻律読み上げチュータスズキクンを利用すれば、多少評価できるのではないだろうか。学習者が発表する時に自分のロールプレイを録音し、授業後スズキクンで作成された音声と比べながら評価できるだろう。

5. まとめと今後の課題

本稿では、改善した評価シートに対するアンケート調査及びインタビューを行った。改善したシートは、前回の評価シートよりある程度よくなったことがわかる。しかし、評価シートの設定が学習者の実際のレベルに適応するのか、また、評価シートの使用が学習者の口頭能力上達に有効であるのかを明らかにするためには、評価基準設定の前に口頭能力テストを行う必要がある。評価シートを使った後にも、妥当性且つ信頼性がある口頭能力テストを行い、学習者のレベルを確認、考察していくことが今後に残された課題である。教育現場における評価の目的は、第一に、学習者の学びを支援することです (Shepard, 2000; Stiggins, Arter, Chappuis, & Chappuis, 2004; 田中・斉藤 1993)。また、適切な評価を行っている教師は、学習に関する評価結果を基に、次に何をどう教えるかを的確に判断できるだけでなく、自分の学習に責任の持てる学習者を育てることができる (Hansen, 1998)。責任の持てる学習者を育てるために、テストだけでなく、「代替的アセスメント」という学習者主導型評価の割合を増加させ、両方をバランスよく行っていき、確実に評価シートによる結果を形成的評価に取り入れることが重要であると考えられる。また、学習者の評価シートに対する関心を高めるために、事前に成績判定方法（形成的評価と総括的評価の比率）を必ず説明しなくてはならない。今後、世界共通の日本語運用能力基準を提唱した JF スタンドダードは、日本語教育現場の評価活動に大きな影響を与えていくだろう。

【参考文献】

- ① (日) 館岡洋子・于康 (2015)『外语教学研究方法与应用』高等教育出版社
- ② 近藤ブラウン妃美 (2012)『日本語教師のための評価入門』くろしお出版
- ① 朱桂栄・砂川有里子 (2010)「ジグソー学習法を活用した大学院授業における学生の意識変容について—活動間の有機的連携という観点から—」『日本語教育 145 号』
- ② 長坂水晶・押尾和美 (2013)「JF 日本語教育スタンダードに準拠した口頭テスト：課題遂行能力測定のためのロールプレイタスクと評価指標の作成」『言語文化と日本語教育』
- ③ 関崎友愛・古川嘉子・三原龍志 (2011)「評価基準と評価シートによる口頭発表の評価：JF 日本語教育スタンダードを利用して」『国際交流基金 日本語教育紀要 第7号』
- ④ 牧野成一 (2011)「日本語口頭能力基準とそれに基準するテスト法—米国 OPI と欧州連合の OJAE の場合」『日語学习与研究』115 号 50-63